

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02747

研究課題名(和文) 発話機能に相応しい韻律 「機能別・韻律の指標」の作成

研究課題名(英文) Identifying appropriate prosodic features of conversational functions:
Development of function-specific prosodic indicators

研究代表者

高村 めぐみ (TAKAMURA, Megumi)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10551111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、同一の発話機能であれば、語彙や表現に関わらず韻律的特徴に共通点があることを明らかにするために行われたものである。まず、日本語初級学習者に「大学場面で必要と感じる機能に関するアンケート」を行い、必要性が高いと回答された20機能(依頼、呼びかけ、感謝等)を抽出した。次に、各機能3パターンのロールプレイについて、日本語母語話者7名が発話したものを録音し音声資料を作成した。最後に、各機能に相応しいと評価された上位3名分の資料の韻律(1音節当たりの持続時間長、F0、音圧)を音響音声学的に解析した。その結果、表現や語彙にかかわらず、13機能で各機能に共通の韻律的特徴があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学、言語学の分野では、非常に基礎的なことであるとも言える「発話機能と声色(韻律)」の関係を述べた先行研究が十分であるとは言えない。そのため、本研究で明らかにしたことは、基礎研究としての役割を担っており、学術的な意義は十分あるものと考えられる。また、日本語教育の分野では、本研究で示した「機能別・韻律の指標」が、従来の共通語を基準としたアクセントやリズムを指導する以外の選択肢の一つに加わったことによる、指導法の幅が広がったと言える。さらに、日常生活において、円滑なコミュニケーションをとるための指標としても使えるため、社会的意義も十分にあるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This article proposes that there are commonalities in prosodic features of speech for identical conversational functions, regardless of differences in terms or expressions. First, a questionnaire survey on the functions perceived to be necessary in a university setting was conducted on beginner-level Japanese language learners. From the survey responses, a total of 20 functions were identified to be highly necessary (e.g., requests, calls for attention, and gratitude). Next, three patterns of utterances were recorded for each function by seven native Japanese speakers during roleplay; these recordings were used as audio materials. Finally, an acousticÓphonetic analysis was performed on the prosodic features (syllable duration, F0, and intensity) of the three most appropriate recordings for each function. The results indicated that 13 of the functions had distinctive prosodic features.

研究分野：日本語学

キーワード：発話機能 韻律 相応しさ 音声教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ある特定の「感情」を聞き手に伝えたい時、そこで選択可能な表現・語彙は一つではないが、韻律には共通点が見られる。例えば「喜び」の感情を表す時は、どの表現・語彙を選択しても大きい声量でかつ高めに発話するという共通点がある。これは、感情のみならず、特定の「場面」、「内容」、「機能」でも同様のことが言える。

まず、「場面」については、1.スピーチ、2.プレゼンテーション、3.インタビューでの応答の3種類のモノログを資料に、韻律的特徴の一つであるポーズ(間)の出現位置、出現頻度、持続時間長に焦点あてて分析を行ったところ、1.スピーチの場合は、非常に長いポーズが「言い切り」の後で、長いポーズが動詞、形容詞、コピュラといった「活用語」の後で、短いポーズが「順接、逆接、取立、動詞修飾」の意味的役割を持つ発話の後で出現する、2.プレゼンテーションの場合は、非常に長いポーズが「話題転換、フォーカス語」の後で、長いポーズが活用語の後で、短いポーズが「逆接」の後で出現する、3.インタビューの応答の場合は、非常に長いポーズが出現せず、長いポーズが「言い切り、話題転換、フォーカス語」の後で出現するが、個人差が大きい。そして、短いポーズが「取立」の後で出現する、というように、内容によってポーズの特徴が異なる¹⁾。次に、「内容」については、視聴者のメールでの悩み相談に答えるという同一場面でも、「慰め」の内容の時と、自分の意見を「主張」する内容の時とでは、異なる韻律的特徴が見られた。具体的には、「慰め」はゆったりとした速さで、ポーズを十分に入れながら話すという特徴があり、「主張」はポーズまでの発話の持続時間長が長く、慰めより速い速度で高低の抑揚をつけて話すという特徴がある²⁾。さらに、「機能」については、「すみません」という表現の3種類の機能(呼びかけ、感謝、謝り)における韻律の相違点を調べるために、拍ごとの持続時間長、ピッチ最高値、最低値、平均値、ピッチ幅を計測し、機能ごとの特徴を分析したところ、1.呼びかけの機能の時は末尾音節の母音部/e/が伸張し、高いピッチで話す、2.感謝の時は全体的に高めのピッチで話す、3.謝りの時は低めのピッチで、さらにどの音節も短めの持続時間長で話す、という特徴があることが明らかになっている³⁾。

(2) 本研究では、「機能」に焦点をあてて分析をする。前述した先行研究³⁾では、「すみません」という表現を一つ扱っただけであるため、他の表現・語彙を追加して研究を行う必要がある。追加する機能の種類については、「ある発話に対して、ある機能を割り当てるといった基本的とも言える機能の判定が困難なもので、これという答えが出ていない」⁴⁾現状を踏まえ、全ての機能の韻律的特徴を網羅的に記述するのではなく、特定の場面で、特定の話者によって使われる機能を取り上げるのが妥当と判断する。具体的には、本研究の結果を日本語教育の音声指導に生かすために、初級レベルの交換留学生が大学場面で頻繁に使う機能に限定して分析を行うのが妥当であると考えられる。初級学習者にしたのは、習得したい機能が中級以上の学習者より多く、かつ習得意欲が高いから⁴⁾である。さらに、日本に対する文化背景知識が少ない可能性が高く、日本人とミスコミュニケーションを引きこす可能性があると考えたからである。

以上、機能によって韻律的特徴が異なることを示し、それを「機能別・韻律の指標」としてまとめる。さらに、日本語学習者にとっては、従来のミニマルペアでの学習よりも、発話場面と文脈を意識しながらそこで使われる機能の韻律的特徴を学習するほうが効果的であることを示す。そして、最終的には、機能に相応しい韻律的特徴で会話をするにより、学習者が日本語母話者と円滑なコミュニケーションがとれるようになることを目指す。

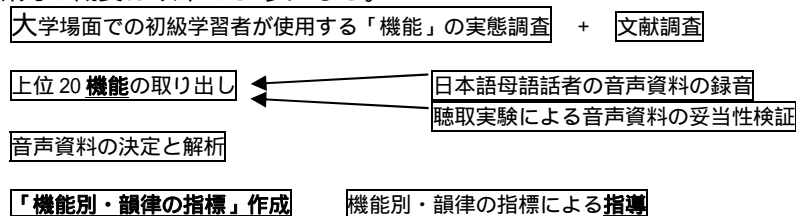
2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、2つある。第1の目的は、同一の「機能」を表す語彙・表現には、共通する韻律的特徴があると示すことである。本研究では数多くある機能の中から、大学場面において日本語初級学習者の使用頻度が高い機能約20種類を取り上げて分析する。

(2) 第2の目的は、「機能別・韻律の指標」を作成することである。最終的には、日本語学習者への音声指導の際の指標になることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究の概要は以下ようになる。



(2) まず資料について述べる。2016年7月、関西学院大学において、日本語学習者約40人を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは、調査用紙を配布して行った。質問項目は、文献の示す58機能×2例=116を参考に作成した。但し、文献では、大学場面で必要な会話の種類収集が目的のため、韻律は一切考慮せずに選定している。そのため、「他者の意見につ

いて自分は賛成か反対かを述べる」のように、異なる2種類の韻律が混在していると予測される質問などの項目が含まれている。この一連の研究の最終的な目的は、機能による韻律の特徴の相違を探ることが目的のため、まず、韻律に焦点をあてて資料を選定すべきである。そこで、筆者とプロの俳優経験がある協力者(N氏、女性)の2人で、韻律に特徴がありそうな項目を抽出した。次に、各機能の表現を数種類ずつN氏に発話してもらい、筆者の聴覚印象で韻律的特徴があると判断した30種類の機能(54の質問項目)を最終的に抽出した。そして、それらをアンケート調査の質問項目とした(表1)。質問は「あなたは今現在、大学生活に必要な以下の目的の会話を日本語で行うとき、どの程度、習得の必要性を感じていますか。」で、留学生41名には「1.ほとんど必要を感じていない」「2.あまり必要を感じていない」「3.少しは必要を感じている」「4.かなり必要を感じている」「5.非常に強く必要を感じている」の5段階での評価を依頼した。

同情	1	同情の気持ちを伝える	風邪を引き辛そうにしている友人に同情の言葉をかける
		Expressing sympathy	saying a word of sympathy to the person who got a cold.
	2	同情の気持ちを伝える	失恋した友人に気持ちは分かると伝えるなど
		Expressing sympathy	telling that you know the feeling to the friend who just got broken heart.
謝罪	1	詫げる	提出物の期限が送れたことを教師に詫げる
		Apologizing	saying sorry to the teachers about the delay of your report.
	2	詫げる	誤って相手のものを壊してしまい、詫げる
		Apologizing	Breaking something by accident and apologize.

表1 アンケート調査項目 一例

その結果、初級学習者にとって必要性が高いと回答された上位20機能(3)(1.挨拶(目上)、2.挨拶(友達)、3.食事の挨拶、4.驚き、5.依頼、6.協力要請(緊急)、7.協力要請(コピー)、8.許可求め、9.お悔み、10.励まし、11.同情、12.指示、13.申し出、14.誘い、15.呼びかけ、16.感謝、17.断り(パーティー)、18.断り(行事)、19.謝罪(目上)、20.謝罪(友達))、それぞれについて、異なる表現で作られた3パターンの発話(計60パターンの発話)(表2参照)を作った。それを、様々な背景を持つロールプレイ協力者(日本語母語話者)7名が機能を意識して発話した。ロールプレイ協力者は、2人1組になり、数ターンから成る短いロールプレイを収録した。今回、プロのナレーターのみならず、一般の大学生にもロールプレイを依頼したのは、将来的には留学生への日本語音声教育を考えているため、より日常を見据え、実際に接する可能性が高い背景を持つ人に協力を依頼したほうが実用的だと考えたからである。本研究でも、このレベルを目指した音声教育を前提としているため、初期段階では、一般大学生の資料のみを分析していた。だが、「韻律で機能を示すことが難しい」という意見を述べた人が複数名いたため、一般大学生のみならず、演劇経験のある大学生とプロのナレーターにもロールプレイの協力を依頼した。但し、前述したように、学習者の目指す日本語は、演劇の舞台上、あるいはプロのナレーターがマイクの前で話す日本語ではない。むしろ、そのような日本語は、日常生活における一般人の発話に比べて、韻律を際立たせる、口を大きく開けるなどの特徴があるため、非日本語母語話者への音声教育で目指す「コミュニケーションに支障がなく、かつマイナスに留意されない発話能力」を基準にすると、「わざとらしい」「大げさだ」などと評価される恐れがある。そこで、演劇経験者とプロのナレーターには、出来る限り日常で使う自然な話し方を意識するようにと依頼した上で、かつ、本研究では、一般の日本語母語話者から機能に相応しい韻律であると評価されたもののみを分析資料として抽出した。

	機能(詳細場面)	パターン1	パターン2	パターン3
1	挨拶(目上) (朝、教師と出合って挨拶をする)	A:おはようございます。 B:おはようございます。	A:気持ちのいい朝ですね。 B:そうですね	A:いい天気ですね。 B:そうですね。

表2 機能を含む会話の一例

(3) 420 発話の音声資料について、機能に相応しい韻律と日本語母語話者が判断するか、信頼性を確認するため、日本語母語話者5名に聴覚印象評定を依頼した。聴覚印象評定者は、7名分の機能が含まれるターンの部分のみをランダムに聞き、その発話が各機能に相応しい韻律であるかを「4.その機能に相応しい口調で話している」「3.ややその機能に相応しい口調で話していると言える」「2.あまりその機能に相応しい口調で話しているとは言えない」「1.その機能に相応しい口調で話していない」の4件法で評定した。評定の結果、各発話上位3名の資料(20機能×3パターン×3名分=計180発話)を「機能に相応しい韻律の音声資料」として抽出し、音響解析を行った。音響解析には、音響解析ソフトPraat(Version6.0.17)を用いた。解析項目は、1音節あたりの持続時間長平均、F0最大値、F0最小値、F0平均値、F0変動幅、音圧最大値、音圧最小値、音圧平均値、音圧変動幅の9項目である。個人の持つ音声の特徴

を排除するため、話者ごとに標準偏差とz値を求め、その数値が平均以上か平均以下かで色分けした。その上で、各機能3パターンの発話に共通する韻律的特徴を探った。

4. 研究成果

(1) 分析の結果、「1.挨拶(目上)」は1音節あたりの持続時間長が短い、「3.食事の挨拶」は音圧平均値が高い、「4.驚き」はF0最大値が高い、F0変動幅が大きい、「8.許可求め」はF0最小値が低い、「9.お悔み」はF0最大値が低い、音圧平均値が低い、音圧変動幅が大きい、「11.同情」はF0最大値が高い、F0平均値が低い、F0変動幅が小さい、音圧平均値が低い、「12.指示」は音圧平均値が高い、「13.申し出」はF0最小値が低い、「15.呼びかけ」はF0最大値が高い、F0平均値が高い、音圧最大値が高い、音圧平均値が高い、「16.感謝」は1音節あたりの持続時間長が短い、「18.断り(参加)」はF0変動幅が小さい、「19.謝罪(目上)」は1音節あたりの持続時間長が短い、F0最大値が低い、F0変動幅が小さい、音圧変動幅が低い、「20.謝罪(友達)」はF0最小値が高い、F0変動幅が小さい、音圧最小値が高い、音圧変動幅が低い、という韻律的な特徴が、20機能中13機能に見られた。

(2) まず、持続時間長について述べる。「1.挨拶(目上)」は3パターンの発話に共通して、1音節あたりの持続時間長が短いという特徴があり、聴覚印象では、1文字ずつ、短く速めに話しているように聞こえると推測される。これは、朝、目上の人と話す第一声は、八キ八キと歯切れ良く話したほうが、元気で健康的な印象を与えるからではないかと考えられる。同様に、「16.感謝」も、1音節あたりの持続時間長が短いという特徴がある。招待されたパーティーが、楽しかったということに対して感謝を伝える際は、間延びした声ではなく、目上の人に対する挨拶同様、歯切れよく話したほうが、相手にとっては好印象であるからだろう。さらに、「19.謝罪(目上)」にも、1音節あたりの持続時間長が短いという特徴が見られる。目上の人に謝罪をするときは、長々と言いつくせずに、潔く謝る態度を見せるために、1音節の持続時間長は長くないほうが良い印象を与えるものと考えられる。興味深いのは、「20.謝罪(友達)」には、1音節あたりの持続時間長が短いという特徴がないことである。同じ謝罪の機能でも、相手によって話し手は韻律を変えていることが分かる。

(3) 次に、F0について述べる。まず、F0最大値が高いという特徴は、「4.驚き」、「15.呼びかけ」に見られる。「4.驚き」で非常に高い声を使っていることから、感情が高ぶると部分的にでも高い声を使うということが推測される。また、「15.呼びかけ」は、遠くの人に気づいてもらうため、高い声を使っているものと思われる。反対に、F0最大値が低いという特徴は、「9.お悔み」、「11.同情」、「19.謝罪(目上)」に見られる。「9.お悔み」や「11.同情」を言う時に高い声を出さないというのは、日本語母語話者であれば納得がいく結果である。日本語では高い声を部分的にでも使うのは、悲しい場面には似つかわしくないという共通認識があるものと考えられる。また、「19.謝罪(目上)」も、F0最大値が低い。これは、目上の人に対してはあまりに高い声を使って謝罪することは好まれないのだろう。

次に、3パターンの発話に共通してF0最小値が高いのは、「20.謝罪(友達)」である。これは、後述するF0変動幅が小さいことと関係があるのだが、非常に高い声は使わないことで、アップダウンの激しい話し方を避けているのではないかと考えられる。反対に、F0最小値が低いのは、「8.許可求め」と「13.申し出」の2つの機能である。どちらも、相手の様子を伺いながら自分の意向を述べる機能である。低めの声を使うことで、自分の主張が強すぎると思われることを避けているのではないかと考えられる。

また、F0平均値が高い機能は「15.呼びかけ」で、これはF0最大値が高い理由同様、遠くの人に気づいてもらうため、全体的に高い声を使っているものと思われる。反対に、F0平均値が低いのは「11.同情」である。日本語では、相手の悲しい気持ちを考えたとき、高い声で話す行為は場に相応しいものではないと判断されるのではないかと。

さらに、F0変動幅が大きいという特徴は、「4.驚き」に見られる。イントネーションについて分析すると、「ねえこれ、すごい」と「見てこれ」には句頭での上昇が見られる。また、「ちょっと見て」には「ちょっと」から「と」にかけての下降がある。さらに、「ねえこれ、すごい」には「ご」から「い」にかけての急上昇があり、高い音調のまま句が終了している。

この「4.驚き」の機能を含む3パターンの発話は、前述したように、驚いたときはF0最大値が高くなるという特徴があるが、同時に低い声も使い、アップダウンの激しい話し方をすることで感情の高ぶりを表現していると推測できる。これとは反対に、F0変動幅が小さいのは、「11.同情」、「18.断り」、「19.謝罪(目上)」、「20.謝罪(友達)」の4機能である。「11.同情」はF0平均値も低い。これは、相手の悲しい気持ちを気遣っての行為ではないかと前述したが、変動幅についても同様で、アップダウンの激しい話し方は相応しくないのだろう。また、「18.断り」、「19.謝罪(目上)」、「20.謝罪(友達)」については、多少なりとも申し訳ないという気持ちを持ちながら「断った」り、「謝った」りする場合も、相手が目上かどうかに関わらず、アップダウンの激しい話し方は相応しくないと考えられる。特に、「謝罪」の機能では、相手によって持続時間長、F0最大値に差があるのとは対照的に、申し訳ない気持ちを表現するためには、相手が誰であるかに関わらず、F0変動幅は小さいという点が面白い。

(4) 最後に、音圧について述べる。まず、音圧最大値が高いのは「15.呼びかけ」である。これは、F0 最大値が高い、F0 平均値が高いのと同じように、遠くの人に気づいてもらうため、非常に大きい声を出していると考えられる。

次に、音圧最小値が高いのは「19.謝罪(目上)」と「20.謝罪(友達)」である。この2つの機能については、相手によってその特徴を変えた韻律もあるが、音圧最小値については、相手が目上かどうかに関わらず、非常に小さい声は使わないことが分かる。謝罪をするときは、F0 変動幅をなるべく一定に保つと同時に、ある程度の音量で話すことが特徴であると言えよう。なお、音圧最小値が低いという特徴を持つ機能はない。

次に、音圧平均値が高いのは、「3.食事の挨拶」、「12.指示」、「15.呼びかけ」である。「3.食事の挨拶」は、友人が用意してくれた料理を目の前にして、気持ちを込めて話す場面である。そのため、全体的に大きい声で発話をしたほうが、相手の料理を褒めたいという気持ちが伝わると考えての行動だろう。また、「12.指示」は、相手に対して自分が指示をする側であることを誇示するために、大きい声で話していると考えられる。声を大きくすることで、上下関係を示しているとも言えるだろう。「15.呼びかけ」については、F0 最大値、F0 平均値、音圧最大値が高いのと同様、遠くの人に気づいてもらうために全体的に大きい声を出していると推測できる。反対に、音圧平均値が低いのは「9.お悔み」、「11.同情」である。どちらの機能も相手が悲しい気持ち、沈んだ様子の時に話す場面である。相手が落ち込んでいるときには、全体的に小さい声で話すことにより、遺憾の念を伝えているものと思われる。

さらに、音圧変動幅が大きいのは「9.お悔み」である。「9.お悔み」の場合、音圧平均値が低いと、非常に小さい声～小さめの間で、声の大小の変化に富んだ話し方をしていることが分かる。これは、相手の悲しい気持ちを考慮しているため、大きい声は出さないものの、相手を気の毒に思う強い気持ちを示すために、小さめの音量の中で、様々な声の大きさを使っているのだと考えられる。反対に、音圧変動幅が小さいのは「19.謝罪(目上)」と「20.謝罪(友達)」である。この2つの機能は、共に F0 変動幅も小さい。F0 変動幅が小さいのと同様、相手に申し訳ないという気持ちを持ちながら謝罪する場合は、相手が目上かどうかに関わらず、声の大小を激しく話すのは相応しくないと考えていることが分かる。

以上、13 機能について、それぞれの機能に見られた韻律的特徴を述べた。どのような表現を使っても、各機能に相応しいと考えられる韻律が存在することが示唆された。

機能	聴覚印象
1.挨拶(目上)	1文字ずつ、短く速めに話す。
3.食事の挨拶	全体的に大きい声で話す。
4.驚き	非常に高い声を使い、アップダウン激しく話す。
8.許可求め	低い声を使って話す。
9.お悔み	高い声を使わない。全体的に小さい。 非常に小さい声～やや小さめの声の間で、声の大小変化はある。
11.同情	全体的に低めの声で、アップダウンなく話す。全体的に小さい声で話す。
12.指示	全体的に大きい声で話す。
13.申し出	非常に低い声を使って話す。
15.呼びかけ	全体的に高く大きい声で話す。また非常に高い声、大きい声を使う。
16.感謝	1文字ずつ、短く速めに話す。
18.断り(行事)	アップダウンなく平坦に話す。
19.謝罪(目上)	1文字ずつ短く、早めに話す。高い声を使わず、アップダウンなく平坦に話す。声の大きさも一定で話す。
20.謝罪(友達)	低い声を使わず、アップダウンなく平坦に話す。小さい声を使わず、一定の大きさで話す。

表 3：各機能の予測される聴覚印象

< 引用文献 >

- 1) 高村めぐみ(2015)『日本語の談話におけるポーズの研究』勉誠出版
- 2) 高村めぐみ(2015)「発話内容に相応しい音声に関する一考察」2015年度日本語教育学会春季大会口頭発表、於:武蔵野大学
- 3) 高村めぐみ(2015)「機能による韻律的特徴の相違 「すみません」を取り上げて」第29回日本音声学全国大会ポスター発表、於:神戸大学
- 4) 松本剛次・金銀美・梓沢直代・幸松英恵(2005)「大学場面で必要とされる会話の種類とその横断的推移についての一考察 - 日本語学習者の会話ニーズ調査の結果より -」『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高村めぐみ	4. 巻 130
2. 論文標題 機能を示す韻律に対する聴覚印象 - 日本語母語話者と中国人学習者の比較 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高村めぐみ	4. 巻 10
2. 論文標題 拒否の機能を示す発話の韻律的特徴 - 「強い拒否」と「弱い拒否」の発話を資料に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高村めぐみ	4. 巻 9
2. 論文標題 留学生が大学場面で必要とする機能会話 - 機能別・韻律の指標作成を目指して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 実験音声学・言語学研究	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高村めぐみ	4. 巻 12
2. 論文標題 「機能」に相応しいと評価される韻律の特徴 - 日本語学習者にとって必要な音声指導を目指して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実験音声学・言語学研究	6. 最初と最後の頁 15-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 コミュニケーションに必要な音声とは何か - 機能に相応しい韻律指導を目指して -
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会口頭発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 日常会話で必要とされる「音声」とは
3. 学会等名 第10回実験言語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 「強い口調」と「弱い口調」の評価に影響を与える韻律要素
3. 学会等名 大東文化大学言語学プロジェクト第2回
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 発話機能にあらわれる韻律特徴
3. 学会等名 言語文化教育研究会第4回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 留学生にとって必要な機能会話 - 大学場面を取り上げて -
3. 学会等名 近畿音声言語研究会月例研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 日本の大学場面で必要とする会話機能 - 日本語教育における韻律指導を目指して -
3. 学会等名 第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 大学場面で必要な「機能会話」に対する聴覚印象の比較
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第3回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 日本語教育における音声教育の再考 - コミュニケーションに必要な音声とは -
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会年次大会CAJLE2019(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村めぐみ
2. 発表標題 音声教育に対する教師の態度と母方言
3. 学会等名 言語文化教育研究会第6回年次大会ポスター発表
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考